

## 「子どもへのまなざしと保護者支援」 講師:井桁 容子 先生(コドモノミカタ代表理事)

子どもをどのように見ていますか？ 保育の出発点でありながら、深い専門性が問われる「子どもへのまなざし」。子どもに関わるすべての方と共有したい大事な内容でしたので、一部ですがご紹介します。(文責:細田直哉)

## ✓ 「まなざし」をセルフチェック！

子どもへの「まなざし」を確認するために写真を見ながら考えました。まず提示されたのは、泣いている女の子(Aちゃん)の写真(ここではイラスト)。近くには赤い箱を押している男の子(Bくん)。赤い箱の中にはピンクの箱。どうやらBくんにピンクの箱をとられて泣いているようです。さて、あなたはこの場面をどう見ますか？



## ✓ 「まなざし」の裏には「べき」がある？

「とっちゃダメ！」と叱りますか？ それは、なぜでしょう？ 「人のものをとる“べき”ではないから」。このように「まなざし」の裏には「べき」が隠れています。ありのままの姿を見ているつもりでも、無意識に「べき」の色眼鏡を通して、行動を「よい／わるい」に色分けして見ています。「わるい行動」は早く「よい行動」にしなければと焦ってしまうのは、自分のその「まなざし」のせいなのです。でも、そんな関わりを見て子どもたちは何を学んでいるでしょう？

## ✓ 「まなざし」が「幼稚なケンカ」の原因

保育者の焦った関わりは、この2人だけでなく、まわり見ている子にも「あの子は人のものをとるわるい子だ」ということを教えています。保育者の「まなざし」が子ども同士の関係にも反映されてしまうのです。その結果、5歳児になっても相手の思いを聞かず、「○○くんがとったー！」と自分の思いを一方的に主張するだけの「幼稚なケンカ」が頻発する園になってしまいます。そのはじまりは0～2歳児のときのこの「まなざし」にあるのです。

## ✓ 「まなざし」を変えると「子どもの育ち」が変わる

一方で、この場面を「子どもの行動にはすべて“わけ”がある」という「まなざし」で見れば、どう変わるでしょうか？ 「おやおや、何が起こったのかな？ ねえBくん、それどうしてもっていいの？」と、子どもの「わけ」を聞くことができます。すると、Bくんは「ここは停留所。ボクが置いた」と教えてくれます。

こうした関わりを見たまわりの子どもたちは、同じようなことが起きた時、「どうして？」と互いの思いを聞き合うことができます。その後、自分の思いを受け止めてもらったBくんは、箱を押しながら1周回ってきた後で、「もういいよ」とAちゃんのためにピンクの箱を置いていってくれたのです。保育者の「まなざし」が変わるだけで、子どもの育ちもこのように変わるのであります。

## ✓ 「まなざし」は保護者支援の鍵

こうした「まなざし」は保護者とも共有できます。Bくんのことを「人のものをとるわるい子」として伝えるのか、「自分の思いを表現しながら、人の思いも受け止める力が育ってきている子」として伝えるのか、それは保育者の「まなざし」次第で変わります。その結果、親子の関係や育ちも変わるのであります。

「子どもへのまなざし」はこのように、子どもの保育だけでなく、保護者支援の鍵にもなります。だからこそ、園の保育の質・保護者支援の質を高めるためには、保育者が互いの関わりのベースにある「まなざし」を出し合い、確認すること。そして、子どもの「わけ」をていねいに聴きながら、その専門性を高めていくことが必要なのです。



## こどもと。

ありのままで、いっしょに学び、育ちあう

VOL.  
2  
2025  
NOVEMBER

未来を  
つくる

星山麻木先生  
インタビュー  
特集

子どもの「発達」のミカタ  
「グレーディーン」から「虹色の世界」へ

〈ミカタ〉を変えれば、  
《ミカタ》になる

2025年度  
国立市幼児教育センター  
研修案内  
春の研修実施報告

いま  
ここから  
まなびの  
たね

未来を  
つくる

# 子どもの「発達」のミカタ ～「グレーゾーン」から「虹色の世界」へ～

子どもの発達が「グレーゾーン」という表現で語られることがあります。実際には、子どもは白でも黒でもグレーでもなく、一人ひとりが個性的に輝いています。その輝きを「虹色」で表現し、国立市でも「発達サポーター養成講座」「クリエイティブ音楽ムーブメント」等を通して、子どもの発達の支援と、保護者・専門職・市民の学びの場づくりを理論・実践の両面で支えている星山麻木先生に子どもの「発達」を見る視点について聞いてみました。

・聞き手／細田直哉（国立市幼児教育センター所長）・編集協力／太田美由紀

## 子どもを変えるのではなく 環境を整える視点を

私はこれまで40年以上に渡り、保育や教育、特別支援に携わってきました。その中でたどり着いたのは、「子どもを変えようとするのではなく、その子がその子らしくいられる環境を整えることが何より大切」という考えです。

最近では、自然とのふれあいを大切にし、子どものペースを尊重する保育園や幼稚園、こども園が増えてきました。そのような園では、発達の特性がある子がいても気になることはあります。子ども同士が自然に関わり合い、保育者は子どもたちのつなぎ手として存在しているように見えます。

一方で、保育の現場には課題も多く残っています。たとえば、狭い部屋や、無機質な建物の一室などで日々過ごさなければならぬなど、物理的に制限のある状況もありますし、手が足りないという大人の都合から「みんな同じように行動

する」など、子どもたちが活動を制限されてしまう場面もあるでしょう。

そのような環境では、保育者にも無理が生じますし、「子どもをコントロールしなければ」というストレスや圧力がかかります。そのようなストレスがそのまま子どもたちの姿に反映され、表れてくることもあります。

また、保育や幼児教育における「環境」とは、単に物理的な空間や備品だけを指すのではなく、「人」という存在そのものも含まれています。つまり、保育者の在り方や関わり方も、子どもにとっての重要な環境です。どんな視点を持ち、どのように子どもたちと関わるのか。その子が安心して自分を出せる環境があるか。それらがとても重要なことです。

「集団に入れない子」がいたとき、「集団に入れるようにするためにこの子をどう指導するか」というアプローチで子どもを変える手立てを考える方も多いかもしれません。しかし、その子にとって必要なことは、「この子が心地よくいられ



## お話 星山 麻木 先生

明星大学 教授  
社会福祉法人くにたち子どもの夢・  
未来事業団 理事

る集団とは、どのようなものだろう？」と考え、柔軟に環境を整えていくことです。

そもそも、その子にとって居心地がよく、安心して過ごせる集団であれば、そこから逃げる必要もありません。このように、私たちの見方を少し変えることで、子どもの姿は自然に変化していきます。

こうした「子どもをどう変えるか」ではなく、「その子がその子らしくいられる環境とは？」という視点は、保育や幼児教育の現場だけでなく、学校や家庭でも必要です。

「みんなと共にいる」のは、とても素敵なことですが、「みんなと同じことができるようになる」「みんなと一緒に行動する」という考え方には、私たち大人をも苦しめます。私たちの持っている「みんなと同じ」「みんなと一緒に」という概念を、今一度問い合わせる必要があります。

ただ単に同じ空間にいることが「共にいる」ことではありません。同じことを、同じ時間に、同じペースでやることが「集団生活」ではありません。むしろ、一人ひとりの「ちがい」があるからこそ、共に過ごすことでそれぞれの個性を生かし合い、関係性が豊かになってゆく。そのような発想に、少しずつ切り替えていくことができればと思います。

## 白でも黒でもグレーでもない 虹色の子どもたち

一人ひとりの「ちがい」やそれぞれの個性や特性を、皆さんはどうなふうに捉えているでしょうか。

「発達障害」に関する認知が広がっていく中で、「グレーゾーン」という言葉を耳にしたことがあるかもしれません。発達障害の診断基準には当てはまらないものの、集団生活で配慮や支援が必要な子どもを指すとき、保育や教育、医療の現場などで使われることがあります。

私は、この「グレーゾーン」という言葉を聞くたびに、ざわざわとした違和感を抱いていました。

グレーは黒と白の間の色です。この言葉からは、どちらでもないグレーは黒でも白でもない「はっきりしない存在」「境界にいて扱いにくい存在」などといったネガティブな印象です。さらに、白はよくて黒はよくないというイメージもあり、私自身は使いたくないと考えていました。

もう10年以上前のことですが、ある日、電車に揺られて家路についていたとき、窓の外を見ていた人たちから、「おお～」「きれい」という歓声が上がりました。何だろうと思い窓の外を見てみると、さっきまで降っていた雨が上がり、夕方の空に大きな虹がかかっていました。周りにいた人たちのほとんどが虹を見つめ、一日の疲れが吹き飛ぶような笑顔になっていました。あの光景は今でも忘れられません。

そのときふと、思ったんです。「子どもたちは白でも黒でもグレーでもない。虹のように、みんな違う色を持っているんじゃないかな」って。

虹は多様性尊重の象徴です。七色に見えますが、その色に境目はありません。すべての色がなだらかにつながって、スペクトラム（連続体）になっています。そのことが、子どもたちの特性に重なると感じたのです。診断があるとかないとか、できるとかできないとか、そんなふうに分けてしまうことで見えなくなっている、一人ひとりの素敵な色がきっとあるはずだ。違うことはそれぞれの強みにもなるし、いろんな色があるからこそ美しい。だからこそ、みんな虹を見て感動するんじゃないかな——。そう思った瞬間、「虹色の子どもたち」という言葉が浮かんできました。

この言葉には、子どもを枠にはめることなく、むしろいろんな色があること、多様な子どもたちがいることを前提に関わっていこうという願いを込めています。

これまで40年間、多くの子どもたちに出会いました。それぞれの子どもたちの特性や、こんなふうに支援するとよかったですという共通項が少しずつ見えはじめていたこともあり、特性を虹の七色になぞらえて説明するようになりました。

たとえば、「レッドさん」は正義感が強くてなんでも一番になりたい、こうありたいという理想を追求します。「オレンジさん」は少しあわてんぼうだけど、とても優しくて誰かのために動ける。「イエローさん」は人情家。好奇心旺盛でエネルギーに動くことで充電して集中できる。「グリーンさん」は不安や緊張が強くて変化が苦手ですが、とても繊細できちんとしています。「アクアさん」は感受性が鋭いアーティスト。一人の時間が必要です。「ブルーさん」はゆったり穏やかで競争は好きではありません。そして「パープルさん」は寂しがり屋。人とのつながりをとても大切にします。親子関係を良好に保つためのケアが必要です(各色の特徴については、p.3参照)。

このように色でイメージを持つと、大人も子どもを理解しやすくなりますし、「評価」や「診断」とは異なる関わり方ができます。そしてとても大事なことなのですが、この色は固定された属性ではありません。一人につき一色ではなく、一人の中にある色が大半を占めることもあれば、少しずついろんな色が混じり合うこともあります。その時々、環境によつても変化します。「今日はイエローとブルーが混ざっているみたい」「普段はグリーンだけど、安心できる環境だとオレンジが出てくる」など、子どもを色で見立てながら、その多様さや変化を大切にしていくことが、「共に生きる」ための大きなヒントになると考えています。

## ジグソーパズルのよう 凸凹を生かし合う

子どもの虹色を理解するための第一歩は、その子の環境をつくっている大人が自身の虹色を理解することです。これは園でも学校でも家庭でも同じです。これまで日本では、自分のことは理解しないままに目の前の子どもをなんとかしようと考えてきました。しかし、子どもの姿はその子と関わる人の関係によって大きな影響を受けています。自分自身（保育者、教育者、保護者）がどのような虹色なのかを学び合うことが欠かせません。

これは、さまざまな場所でワークショップをやってきた経験からわかってきたことですが、自分の「いいところ」「素敵なところ」を映し出してくれる、あたたかく信頼できる関係性の中でこそ、自分の本当の色が見えてきます。また、基本的に自分はこの色かなと思っていても、Aちゃんとの関係、Bちゃんとの関係では、それぞれ違う色が出てくると気づくこともあります。

このように自分自身への理解が深まっていくなかで、子どもたちのこともよく分かるようになっていくのです。今までにはその子の問題だと思っていたことが、自分と子どもの関係性によって立ち現れてくることに気づきます。多数派の中にもある少数派の要素を、お互いに自分ごととして理解していくと、どの色がいい、どの色が悪いではなく、それぞれの組み合わせの中で生まれてくる関係性として捉えられるようになっていく。これは、大人と子どもだけでなく、大人と大人、子どもと子どもも同じです。

私はこうした関係性をよくジグソーパズルに例えます。ジグソーパズルは、それぞれのピースの凸凹をうまく組み



合わせて大きな一枚の絵をつくりますよね。それと同じです。真っ白なふりをさせ、デコボコを削って埋めて、正方形を並べるだけでは、ただ正方形が大きくなるだけで新しいものは生まれない。お互いの欠点を攻撃し、同じではないところを指摘して揃えるのではなく、自分の苦手なところ得意な誰かにお願いして、誰かとながってこそ、自分を超えた新しいものが生まれます。

大人の正義に子どもを当てはめようとせずに、それぞれのありのままの色や凸凹を尊重して生かし合うことこそ、「共に生きる」ことなのだと思います。「共に生きる」ことは、難しい理屈ではありません。隣にいる誰かをちゃんと見る。違いを否定せずに面白がる。困っている人がいたら「どうしたの?」と声をかける。それを日常の中で積み重ねていくことで、「共に生きる社会」が現実のものになっていく。

子どもたちから学ぶことは本当にたくさんあります。ありのままでいられる環境をつくりながら、私たち大人もまた、自分の色に気づき、子どもたちと共に試行錯誤しながら創り上げていく。そんな姿勢を持ち続けたいと思います。

### プロフィール

明星大学教育学部教育学科 教授

星山 麻木 ほしやま・あさぎ

保健学博士。日本音楽療法学会認定音楽療法士。

一般社団法人 こども家族早期発達支援学会会長。

一般社団法人 星と虹色な子どもたち代表。

著書に『障害児保育ワークブック』『ちがうことは強いこと』

『星と虹色なこどもたち』等多数。

Tokyo Star Radio (八王子FM) で毎週土曜8:00~8:25  
「星山麻木の虹色子育てラボ」を放送中。

### 発達サポーター養成講座

ここで語られた子どもの発達のミカタについては、星山先生が講師の「発達サポーター養成講座基礎」で詳しく学ぶことができます。

令和8年度の開講予定は、来年春頃に矢川プラスこどもラボホームページに掲載します。お楽しみに！

### クリエイティブ音楽ムーブメント

一人ひとりの虹色の輝きが生かされ、温かな場が生まれるクリエイティブ音楽ムーブメント。

一年に6回ほど、矢川プラスで開催しています。

# 虹色な子どもたち

すべての色がすべての人の中にそれぞれの割合があります。あなたは、何色が濃いかな？

## なんでも1番正義のみかた……レッドさん

規則的なことが好きで、正しくありたいという気持ちが強い頑張り屋。そのせいで友だちとトラブルになり、落ち込むことも。一人で静かに集中できる場所や気持ちを受け止めてくれる人がいると安心できます。



## こころやさしい あわてんぼう……オレンジさん

自分のことより人のことに一生懸命。困っている人がいると見すごせません。忘れ物は多く、整理整頓や、同時にいろんなことをするのは苦手。わかりやすく環境を整えたり、困った時にフォローしてくれる人がいると安心します。

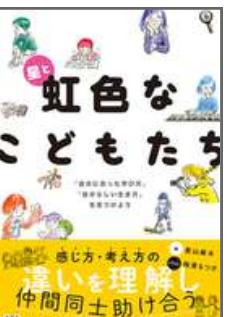


## すばやく動く 人情家……イエローさん

好奇心が旺盛で、動き回ることが大好き。じっとしているとソワソワ落ち着きません。身体を思いきり動かしたり、ハンモックやブランコに乗ったりする方が落ち着きます。一緒に楽しんでくれる人がいると安心します。



## もっと知りたい！ 「虹色なこどもたち」



星と虹色なこどもたち  
学苑社

星山 麻木著  
相澤 るつ子イラスト  
2,200円(税込)



虹色なこどもたち  
世界文化社  
星山 麻木著  
相澤 るつ子イラスト  
2,200円(税込)

## 繊細なきちんとさん……グリーンさん

やさしくおだやかで、とても繊細。見通しが立たない、初めての環境だと緊張してドキドキ。柔らかいものやひとりで落ち着ける空間があったり、気持ちをわかって寄り添ってくれる人がいると、落ちつくことができます。



## 孤高の天才……アクアさん

感受性が鋭いアーティストや研究者のようなタイプ。感覚が繊細なため、大勢の中にいると疲れてしまいます。イヤーマフで音を軽減したり、ひとり静かにマイペースで過ごせる環境や、そっと寄り添ってくれる友だちがいると安心します。



## ゆっくりおおらか……ブルーくん

おおらかで、年下の友だちや動物も大好き。じっくりやることが好きで、すばやく行動したり、競争することは苦手です。ゆっくり始められる時間があったり、さり気なくサポートしてくれるやさしい友だちがいると自信がもてます



## 甘えん坊のさみしがりや……パープルさん

甘え上手で、自分の気持ちを大切にします。ときには、人の気をひこうして本心と反対のことをしてしまふことも。自分の役割をもらったり、気持ちを受け止めて寄り添ってくれる人がいると、心が満たされ落ちつきます。



## 〈ミカタ〉を変えれば、《ミカタ》になれる ～「虹色の世界」へ向かうための4つのステップ～

細田 直哉 (国立市幼児教育センター長)

### 「虹色」は「感覚の多様性」から

子どもたちは白でも黒でもグレーでもなく、それぞれがユニークな「虹色」に輝いています。星山先生がそう語るとき、それは目に見える行動のちがいだけでなく、そうした行動のもとにある感じ方、世界の見え方、安心できる環境などがみんな少しづつちがっているということを意味しています。

しかも、それは子どもだけではありません。大人も一人ひとりがユニークな「虹色」。それぞれの感覚はみんな少しづつちがっています。だから、自分の感覚や基準だけを頼りに一生懸命子どもと向き合ってもどこかズレてしまします。そんな時、どうしたらよいでしょうか？

じつは、〈見方〉をちょっと変えるだけで、子どもの《味方》になることができ、子どもとの関係もよくなります。ポイントは以下の4つのステップです。

### ポイント① その子が見ている世界と共に見る

第1に、自分と子どもの「虹色」のちがいを踏まえて、それぞれの子どもの世界を共に見ること。「自分にとっての正しさ」は「その子にとっての心地よさ」とは限りません。静かな場所が落ち着く子もいれば、動ける方が落ち着く子もいるのです。その子が見ている世界が見えてくれば、それまでわからなかった行動のわけも見え、その子をどう支えればよいのか手がかりも見えてきます。

### ポイント② 「ちがい」を「強み」として見る

第2に、こうした「ちがい」をダメなことではなく、その子の「強み」として見ること。何をやるにも時間がかかる子は、ものごとを人一倍じっくり探究できる子なのかもしれません。人とはちがうその子の「虹色の個性」の芽を大切に育てることから、その子らしい輝きが見えてきます。その輝きは世界を明るく照らす光になるでしょう。



### ポイント③ 「子ども」ではなく「環境」を変える

第3に、「子ども」ではなく「環境」を変えてみると。それぞれの「虹色の個性」はその子が飛びたための「翼」のようなものです。今の環境でその子が飛べないとしたら、問題は子どもではなく、環境にあるのかもしれません。飛びための「空気」(=最適な環境)さえあれば、今のその子のままで、安心して飛ぶことができるはずです。

### ポイント④ 「裁判官」ではなく「通訳」になる

第4に、子どもたちの「関係づくり」を支えること。そのために、大人は善悪をさばく「裁判官」ではなく、それぞれの思いをつなぐ「虹色の通訳」になること。子どもたちが互いの「ちがい」を否定し合うのではなく、生かし合える関係を築けるようになれば、誰もが安心して共に育ち合い、共に支え合える、温かく創造的なコミュニティが生まれます。「虹色の個性」はたんなる個人の力ではなく、みんなで共に生きる社会の力もあるのです。そのようにして一人ひとりが輝く関係が実現できれば、個人として幸せに生きられるだけでなく、社会としても活力が生まれます。

### 園・学校から社会を変えていく

園や学校は社会に出る前の単なる準備期間ではありません。それ自体が小さな社会です。その社会を「現在の社会の縮図」ではなく、わたしたちがつくりたい「未来の社会のひな型」にすること。それができれば、そうした社会を実際につくりだす力をもった子どもたちが育つでしょう。一人ひとりが個性的に輝きながら、それぞれの凸凹がつながり合い、一人では生み出せない大きな美しい絵を描き出すことができる「虹色の世界」。その未来への扉は「虹の彼方」にではなく、「いま・ここ」にあるのです。

# 2025年度 国立市幼児教育センター研修案内

## ～保育の専門性を高めるために～

こどもラボでは、11月以降もたくさんの学びの機会を用意しています。

「実りの秋」に、保育の専門性を高め、現場の「たね」も実らせませんか。

詳細は、こどもラボのホームページにて順次ご案内予定です。皆さまのご参加、お待ちしています。



こどもラボHP

### 国立市内の幼稚園・保育園・こども園などにお勤めの方へ

#### 「保育の質を高める職場環境」をつくる オンライン動画研修

保育の質を高めるチームづくり

視聴期間 11/1(土) ~2026/3/31(火)

講師 矢藤 誠慈郎(和洋女子大学 教授)

人間関係がよくなり、保育の質も高まる職場環境づくりのポイントを学べます。すこま時間に視聴できる30分の動画が3本です。個人で見ることも、チームで見ることもでき、すぐに試したくなるヒントが満載です。

#### 「保育の実践力」を高める①「運動あそび」

遊びながら学ぶ研修①「運動あそび」

日時 1/27(火)15:00~17:00

講師 堀内 亮輔(東京女子体育大学 講師)

NHK「おかあさんといっしょ」の運動遊びの監修をしている堀内先生に、子どもの体と動きを育てる運動遊びのコツを学んでみませんか？ 楽しく遊びながら、遊びの専門性を高められる研修です。

#### どなたでも参加できる研修 (市民・保護者・教員も参加可能)

##### 子どもから「人間」を学ぶ オンラインセミナー

「人間学」としての保育学

日時 11/17(月)・12/18(木)・1/19(月) 19:00~20:30

講師 汐見 稔幸(東京大学名誉教授)

細田 直哉(国立市幼児教育センター 所長)

「子ども」を考えることは「人間」のはじまりとその可能性を考えること。「人間」についてのあらゆる学問を見渡し、広い視野のもとで、子育て・保育・教育についてあらためて考えていくオンライン・セミナーです。子ども・保育・教育に関心のある方ならどなたでも参加できます。

#### 「保育の実践力」を高める①「わらべうた」

遊びながら学ぶ研修①「わらべうた」で楽しく保育

日時 11/29(土)10:00~12:00

講師 相京 香代子(わらべうた研究家)

「わらべうた」を学べば、保育が楽しくなるだけでなく、子どもにさまざまな力が身につきます。最先端の保育の知恵が含まれている「わらべうた」を楽しく遊びながら学んでみませんか？ 保育の「ひきだし」が増える研修です。

#### 「保育の知識」をアップデート オンライン研修

21世紀の証拠に基づく保育実践

日時 2/27(金)18:00~20:00

講師 掛札 逸美(保育の安全・研究センター 代表)

昭和の保育の「常識」は、最新科学では「非常識」!? 最新科学を知り、保育の知識をアップデートすることで、子どもの安全と育ちを保障できます。『21世紀の証拠に基づく「子ども育て」の本』の掛札先生のオンライン研修です。

### 保育士等キャリアアップ研修 (受講料免除対象者のみ受講可能)

#### 東京都保育士等キャリアアップ研修 オンライン研修

「保健衛生・安全対策」

日時 2/5(木)・2/12(木)・2/19(木)10:00~16:30

講師 掛札 逸美(保育の安全・研究センター 代表)

並木 由美江(聖学院大学 非常勤講師)

この分野の第一人者である掛札先生と並木先生の最強コンビが講師。子どもの命と育ちを守るために現場でできることが明快に理解でき、実践力も身につく研修です。各園からオンラインで受講できます。